

エドウィン・ブースのイアーゴ

Edwin Booth as Iago

野口 孝行

NOGUCHI Yoshiyuki

Iago is a diabolical villain, who brought catastrophe to the love between Othello, a Moorish general, and his beloved wife, Desdemona. It is of course a detestable role, but it received much attention in the 19th century because it was played by great actors of the time, whose performances were highly regarded. Of them, Edwin Booth played the most widely admired Iago, revealing the least of Iago's inner villainy and making even the spectators believe his honesty and sincerity. When he appeared in the Lyceum in 1881, he and Henry Irving, actor-manager of the theater, exchanged the roles of Othello and Iago every week, with Ellen Terry playing Desdemona. This was an exquisite staging, bringing together the greatest actors and actress of the time. Irving, too, received much acclamation as Iago. This paper argues the two actors' splendid acting of the part, with focus on Booth's Iago.

I

『オセロー』は悲惨な悲劇であるが、舞台では非常に人気の高い作品である。1649年の清教徒革命で封鎖されていた劇場が60年の王政復古で再開されて以来、今日に至るまでほとんどその人気は衰えることがない。体格に恵まれないにもかかわらず、その迫力の演技でオセローを最も得意として生涯演じ続けたキーン (Edmund Kean) をはじめ、サルヴィーニ (Tommaso Salvini) やオリヴィエ (Sir Laurence Kerr Olivier) など、王政復古期の名優ベタートン (Thomas Betterton) 以来数多くの名優たちが、新妻への信頼と腹心の部下の唆しとの間で苦悩するオセローの姿を見事に演じてきた。19世紀には黒人俳優によるオセローも登場する。さらに20世紀に

は、黒人スターのポール・ロブソン (Paul Robeson) がオセローを演じてイギリスでもアメリカでも大成功を収めた。特に、彼が1943年にニューヨークで樹立した295回にわたる連続公演記録は、黒人俳優が白人女性にキスすることなど許されざることであった当時のアメリカでは大事件であった。しかし、それ以来、白人の劇団の中でもこの役は黒人が演じることが多くなり、今日ではそれがオーソドックスにさえなっている。もはや白人がオセローを演じることの方が不自然にさえ思われる今日、それでもこの役を演じたかったパトリック・スチュアート (Patrick Stewart) は、1997年、黒人が多く住むワシントンで——といっても、実際に劇場に詰めかけた観客のほとんどは白人であったのだが——他の人物をすべて黒人に演じさせ、肌の色を全く逆にした形で念願のオセローを演じた。この劇はそれほどまでに、俳優が挑戦したくなる作品であり、また観客が観たがる作品でもあり、今なお素晴らしい舞台が生まれているのである。

この作品の魅力には、ヴェニスとトルコのキプロス島を巡る攻防戦という背景を持ちながらも、一組の新婚夫婦の破綻という身近で親しみやすい問題がテーマになっていることもあるだろう。しかしその物語はといえば、その破綻はひとりの悪党の悪巧みによるものであるし、最後には、主人公が誤解したまま妻を殺してしまい、そのあと真実を知って自分も自殺してしまうという、非常に悲惨であるだけでなく、きわめて不快な話でもある。俳優たちがイアーゴを演じたがらなかったのも無理もないことだろう。しかし、この状況さえ、19世紀になると一変する。キーン、ヤング (Charles mayne Young)、マクリーディー (William Charles Macready)、ジュニアス・ブース (Junius Brutus Booth)、フェクター (Charles Albert Fechter)、エドウィン・ブース (Edwin Thomas Booth)、アーヴィング (Sir Henry Irving) ら名だたる俳優たちがオセローばかりでなく、印象的なイアーゴも演じるようになった。しかも、オセローに異常なまでに執着したキーンを除いて、これらの名優たちはオセロー役でよりもイアーゴ役の方が評価が高いのである。アーヴィングなどは、彼の演技の中でオセローは最悪と酷評されながらも、イアーゴでは最高と称されたほどである。舞台には偉大なイアーゴが登場するようになり、オセロー役とイアーゴ役、ときにはデズデモナ役も含めて、人気俳優たちの共演がこの作品の人気にさらに拍車をかけた。特に、オセロー役とイアーゴ役の俳優がその演技で対決する第3幕第3場のいわゆる「唆しの場」は、この舞台での最大の見物となったのである。

キーンは1814年5月5日にドルーリー・レインで初めてオセローを演じているが、その翌日から6月9日まで8回イアーゴを演じた。この頃になると観客も、人気俳優のオセローとイアーゴの両方に関心を持つようになったようだ。このとき、コヴェント・ガーデンで初めて両方の役を交互に演じたのがヤングである。10月にはマクリーディーがヤングと共演し、二大俳優が

オセローとイアーゴを交替で演じる初めてのケースとなった。17年7月には、ヤングのオセロー、ジュニアス・ブースのイアーゴ、オニール嬢 (Eliza O'Neil) のデズデモーナという三大俳優の共演も実現した。

しかし、イアーゴは俳優や観客にとって、なぜそれほどまでに魅力的な人物になり得るのだろうか。たとえば『ヴェニスの商人』のシャイロックも悪役だが、彼には立場上同情すべき点多々ある。いくら異教徒の高利貸しとはいえ、アントーニオの彼に対する非人道的な仕打ちはひどすぎる。法廷でアントーニオの肉を切り取ろうとするのも酷だが、結局その裁判に負けて財産を失い、改宗までさせられる彼の姿は十分に悲劇的である。そのため、キーンが初めてドルーリー・レインで演じて以来、彼は虐げられた民族の代表として観客の同情を集め、悪役でありながら今では悲劇の主人公のような存在にさえなっている。この役を最も得意として生涯演じ続けたアーヴィングは、シャイロックに威厳さえ持たせた。マクベスやリチャード三世も悪人だが、彼らは主演である。言うまでもなく、彼らの人生もまた十分に悲劇的である。ところが、イアーゴには彼らほどの悲劇性はない。動機も曖昧だし、何よりも、やっていることがひどすぎる。だから、最後に悪事が露見して引き立てられていく彼の姿に同情の念が湧くこともない。シャイロックを立派な人物として演じたアーヴィングも、イアーゴを演じるときにはその偽善者ぶりを強調した。舞台上で注目されるようになったといっても、あくまでも憎まれ役としてである。シャイロックとは時を同じくして関心を集め始めたのだが、事情は全く異なっている。

悲劇性も十分とはいえ、したがって破滅に至っても同情を誘うこともないこの人物の舞台での人気は、その活躍ぶりと登場時間の長さ、そして何よりもほかの人物たちの前で彼が演じる誠実さの演技、つまり役者ぶりだろう。この劇はオセローとデズデモーナの駆け落ちから始まるのだが、主要な人物が皆キプロス島に移る第2幕以降の展開は、ほとんどがイアーゴの企みによるものである。劇の進行を操作している感さえある。それに、よく話す。彼はほとんどの人物からあつく信頼され、相談に乗り、いかにも親しげに会話している。主人公にありがちな独白が最も多いのも彼である。そして、本音を観客に独白しながら、他の人物たちに誠実なふりをする。いかにも誠実な人物を演じることは彼の処世術でもあり、また、社会では誰もが多かれ少なかれしていることではあるのだが、この物語の中では、彼が悪事を成功させるために不可欠な条件となっている。彼は常に、誰かに疑われたら終わりだという不安を抱えてもいるのである。そのあたりが、演じる方にも芝居を観る側にも面白みがあるのだろう。

II

19 世紀、最も印象に残るイアーゴを演じたのは、エドウィン・ブースとアーヴィングである。このふたりは、それぞれ 19 世紀後半のアメリカとイギリスを代表する俳優であり、どちらのイアーゴも高い評価を得ているので、どちらの方がよかったのかは今日の我々には判断が難しい。しかし、1881 年 5 月、ロンドンの観客にはその判断をする機会が与えられた。彼らは、アーヴィングのライシーアム劇場でオセローとイアーゴを交替で演じたのである。デズデモーナ役は、アーヴィングと共に四半世紀にわたって英国劇壇を支配し続けた女優のエレン・テリー (Ellen Terry) が務めた。三大俳優の共演という形で、ブースとアーヴィングのオセローとイアーゴを観ることができるというので、観客は昼間から席を求めて劇場に詰めかけ、¹ この舞台は興行的にも大成功であった。

この共演の話は、前年からロンドンで巡業中のブースのもとを、かつてマンチェスターで彼の舞台に出演したことのあるアーヴィングが訪ねたときに出たものである。初めはブースがライシーアムで演じるだけの話だったのだが、すぐにアーヴィングが『オセロー』で三人で競演することを提案して話が決まった。² テリーは、アーヴィングがブースを温かく迎えることで、逆にブースのプライドが傷つくことを心配していたが、³ 彼は快く同意したし、後に感謝も述べている。78 年からこの劇場で優れた経営ぶりを発揮しているアーヴィングにとっても、これは願ってもないチャンスだったに違いない。もちろん、これがただの興行目的の舞台でなかったことはいまでもないだろう。この作品なら、英米の二大俳優がお互い相手の陰に隠れてしまうことなく十分に演技を競い合うこともできるし、人気女優のテリーも実力を発揮できる。この舞台は、彼らの実力を示す競演の場ともなったのである。

しかしながら、『オセロー』は、この作品を提案したアーヴィングにとって必ずしも有利な作品ではなかった。彼は 76 年にオセローを演じたことはあったのだが、得意ではなかった。背が高かったのだが、やせていたため、その分よけいに弱々しく見えてしまう彼の体格、しっかりしない足取り、声量も厚みもない声は、オセローの力強さ、迫力や威圧感を表現するのがきわめて

¹ *The Illustrated London News* (May 7, 1881). Arthur Colby Sprague, *Shakespearian Players and Performances* (Adam and Charles Black, 1954), p.124.

² Austin Bereton, *The Life of Henry Irving* (Longmans, Green, and Co., 1908), vol.I, p.333. これは、どんな要望にも応じるというアーヴィングの申し出に対してブースが『オセロー』を提案したというストーリーの記述と異なるが、おそらくこれはアーヴィングの提案だろう。Bram Stoker, *Personal Reminiscences of Henry Irving* (Macmillan, 1906), vol.I, pp.88-89.

³ Ellen Terry, *The Story of My Life* (McClure Company, 1908), pp.221-22.

困難だったに違いない。第1幕第2場、オセローが争いを鎮めようとして言う「煌めく剣を鞘に収めろ、夜露で錆びる」という台詞も、アーヴィングは観客に背を向けて立ち、興奮した様子で両手を振り上げ、いらいらして言った。⁴ これではせつかくの名台詞も、オセローが体中から発する威圧感というより、事実上この劇場を支配していた経営者を兼ねる主演俳優の叱責といった感じだろう。共演したテリーも、「彼は声を張り上げてわめいたり怒鳴り散らしたりして声は出なくなるし、素早く動くべきところではのろくなり、力強くなければならないときには取り乱した。彼がこの役を演じるのは、見るに堪えなかった」とまで言っている。⁵ もちろん、『ベル』で罪悪感にさいなまれる主人公マシアスの心理を存分に表現したアーヴィングである。オセローの苦悩は十分に演じきったはずである。それでも、実際には、やはり彼のオセローが高い評価を得ることはなく、この共演で自分でもそのことを実感した彼が、それ以後オセローを演じることは二度となかった。イアーゴーにしても、彼には以前に演じた経験がなく、今回が初めてであった。この点では、長年にわたってオセローもイアーゴーも演じて演技に磨きをかけてきたブースに比べて、彼は有利でないどころか圧倒的に不利であった。

ブースにとっても不利な理由があった。第一に、競演の場がアーヴィングのライシーム劇場である。この劇場は、あらゆる意味でアーヴィングのものであった。劇場にもスタッフにも観客にもアーヴィングは慣れており、スタッフは彼の思うままであったし、当時のロンドンでアーヴィングとテリーは絶大な人気を誇っていたのである。実際、ブースは「間違いなくすばらしい俳優であるが、彼の考えはアーヴィングとは異なり、あいにく彼の演技だけが唯一劇場にも劇場を支配している雰囲気にも合っていなかった」という指摘さえある。⁶ アーヴィングの斬新な演技にすべてを合わせたライシームの舞台にあって彼の演技は、その芸術性は高く評価されたものの、古風な印象はぬぐえなかった。また、時期的な問題もあっただろう。ブースは64年に愛する妻と死に別れ、65年に自ら経営も手がけるウィンター・ガーデン劇場で『ハムレット』の100回にわたる連続公演を成し遂げ、アメリカ最大の悲劇俳優としての名声を得るが、その直後に弟のジョンがリンカーン大統領を暗殺したため、一時舞台から去ることになった。その後人々の要望に応える形で復帰したが、67年に劇場を火災で失ってしまう。2年後に建てたブース劇場もわずか5年で経営が行き詰まり、多額の負債を背負って手放すことになり、すでに劇場を持た

⁴ *Academy* (February 19, 1876). Dutton Cook, *Night at the Play* (1883), p.308. 共に Alan Hughes からの引用。Alan Hughes, *Henry Irving, Shakespearean* (Cambridge Univ. Press, 1981), p.143.

⁵ Terry, p.225.

⁶ Richard Dickins, 'Irving as Othello', H. A. Saintsbury and Cecil Palmer (eds.), *We Saw Him Act: A Symposium of The Art of Sir Henry Irving* (Benjamin Blom., 1939), p.98.

ぬ身になって7年になっていた。一方のアーヴィングは、71年にライシームでマシアスを演じて大成功をおさめて以来30年にわたってロンドンの劇壇に君臨することになる。78年末にライシームの経営権も手にし、劇団にテリーを迎えて間もない、まさにこれからという時期にあった。年齢では、ブースはアーヴィングよりもわずか5歳年上なだけであるが、ふたりの俳優人生を比べてみると、片や、下り坂とは言わないまでも、数々の栄光や不幸、失望の末の巡業中であり、もう一方は、確固たる名声を手にしてアクター・マネジャーとしての人生を歩み始めたばかりの絶頂期だったのである。

この競演はどちらにとっても文句なしの状態で臨んだものではなかったのだが、それでも、このふたりのイアーゴはこの時代を代表する偉大な役柄のひとつであった。とりわけ、ブースがハムレットやリシュリュウと共に得意として演じ続けた彼の印象的なイアーゴは、トーマス・ヒックスの描いた肖像画や彼がファーネスに送ったこの役の演じ方と共に、シェイクスピア上演史には欠かせぬ存在になっているのである。

1881年5月2日、この共演はブースのオセローとアーヴィングのイアーゴという形で始まった。ブースはオセローも得意としてはいたが、彼も体格的には不向きだった。背も高い方ではなかったし、アーヴィングほどやせてはいなかったものの、決してがっしりとした体格ではなかった。それでも、彼は無理して威圧感を発揮しようとはせずに、オセローの詩的な部分や優しさを演じてみせたのである。デズデモーナのハンカチを振り払うときも、彼は、彼女が膝について彼の額を縛ろうとする手をゆっくりと押しつけ、無理して無関心を装いながら去ろうとするのだが、優しく振り返り、広げた両腕に彼女を誘い、「さあ、一緒に行こう」と言って、彼女の目をじっと見つめ、優しく彼女を抱きしめてからゆっくりふたりで退場した。⁷ ブースは、「オセローがひどい言葉で彼女を圧倒し、彼女の幸福の幻想を打ち砕くあの場面（第4幕第2場）まで」、嫉妬に苦しみながらも、常にデズデモーナに優しく接した。デズデモーナを演じたテリーも、ブースが演じた優しい愛情がなければ、夫に疑われながらも盲目的に彼を愛し続ける彼女を演じるのは困難だと言っている。「確かに、恋愛は人を盲目にするものである」、それに「オセローが不機嫌なのにキャシオーの復職をせがむ彼女の姿は観客にもいらだたしいものである」のだが、彼女は「デズデモーナを頭の悪い女性にしたくなかった。」ブースの優しいオセローは、彼女の演技に非常に役立ったのである。⁸

⁷ Horace Howard Furness (ed.), *A New Variorum Edition of Shakespeare: Othello* (Dover Publications, 1963), p.194.

⁸ Terry, p.223.

また、ブースは俳優としてもテリーに気遣いを見せた。『オセロー』には、黒人が白人女性に触れるという物語上の問題だけでなく、舞台では、肌の白さをより際立たせるためにメイクを施した女優に黒塗りの男優が触れるという物理的な問題もある。オセローのメイクがデズデモーナの白いメイクを黒くませてしまうこともあれば、それを避けるためにオセローがメイクではなく黒い手袋をすることもあった。⁹ ブースはテリーの手を取るとき、衣装の角で自分の手を覆って自分のメイクが彼女につかないようにしたのである。アーヴィングがオセローを演じて、彼に捕まれたところが彼と同じくらい黒くなってしまったとき、テリーはブースのこの気遣いに感謝した。¹⁰ 役でも俳優としても、彼はデズデモーナに優しく接したのである。

アーヴィングのイアーゴーも好評だった。「彼は生まれて初めて、満場の喝采を浴びるということがどういうことかを知った」と、テリーが語っているほどである。¹¹ 彼は誰よりも、イアーゴーよりも「身分が上な者たちよりも豪華な服装をし、常に最初に目につく中心人物」であった。¹² そして、彼が登場する場面では、彼が活躍するときや独白するときはもちろん、台詞のないときでさえも、「手で堅い胸を叩いたり髪をかきむしってみたり…薄い顎髭をねじったり、剣やベルトの金具をもてあそんだり」、絶えず斬新な脇演技で観客の注目を集めたのである。¹³

第1幕第3場、ロダリーゴーが「土地を全部売るよ」と言って立ち去ったあと、キャシオーの職を奪う方法を考える独白で、アーヴィングは、「どうする。どうする」と言って両手で顔を押しさえ、長い間をおいてから「ゆっくりと手を下ろし、恐ろしい策略を思いついて生き生きとした顔を見せた。」これは以前にもフェクターの舞台でライダー (John Ryder) がテーブルの角に腰掛けながら行ったものでもあるのだが、細い指の間からゆっくり現れるアーヴィングの不気味な表情の印象があまりにも強烈で、このとき以来、今日でも踏襲され続けている演技である。¹⁴ 第2幕第1場、キプロス島に着いて、オセローの到着を待ちながらデズデモーナとキャシオーが挨拶を交わす場面でも、その様子を眺めながら独白するアーヴィングに観客の目は集中した。彼は台詞を言いながら、「葡萄をつまみ、ゆっくり食べながら、あたかもそのひとつひとつが彼の口か

⁹ Lois Potter, *Shakespeare in Performance: Othello* (Manchester Univ. Press, 2002), pp.30-31.

¹⁰ Terry, p.222.

¹¹ *Ibid.* p.224.

¹² *Macmillan's Magazine*, XIX (May 7, 1881), p.210. Marvin Rosenberg, *The Masks of Othello* (Univ. of Delaware Press, 1954), p.126.

¹³ *Athenaeum* (May 7, 1881), p.633. Rosenberg, p.126.

¹⁴ H. M. Walbrook, 'Henry Irving: His Personality and His Art,' *The Stage Year Book* (1928). Arthur Colby Sprague, *Shakespeare and Actors* (Harvard Univ. Press, 1944), p.189.

ら吐き出される美德を表しているかのように、その種を口から飛ばした」のである。¹⁵ また、キャシオーとモンターノの争いを止めようとするときには、アーヴィングは身軽な動きで注目された。彼はここで、赤いマントを翻しながらふたりの間に入り、「あたかも彼らが闘牛場の牛であるかのように」、軽々とその間を飛び回った。¹⁶ これは、オリヴィエをはじめ、後の俳優たちも踏襲している演技である。そして、第5幕第1場、暗闇でロダリーゴを刺し殺す場面では、彼の体からゆっくりと剣を引き抜いたあと、「死んだかどうか確かめるために、この冷笑的な悪役が面白半分にもロダリーゴの体を足でひっくり返した」のを、アセニウム紙は絶賛している。¹⁷ 単に目立ちたいだけではない。アーヴィングは、イアーゴの企みの恐ろしさだけでなく、誠実な態度の裏側で内心人を見下している彼の内面も、仕草で鮮明に表現したのである。

テリーは、自分のデズデモーナが最もうまくいったのは観客にではなく、アーヴィングに対してだったと語っている。第4幕第2場、オセローにひどい言葉を投げつけられたあとの彼女の懇願が、アーヴィングの目を、演技ではなく本当の涙で潤ませたのである。「私が『ああ、イアーゴ、どうしたら夫の愛を取り戻せるの』と聞いて顔を上げると——デズデモーナはもうすでに泣くどころではなかったので、私は泣いていなかったのだけれど——ヘンリーの目にはきらきら光る柔らかな大粒の涙があふれていた。彼はイアーゴになりきって演じていたにもかかわらず、私の演技に深く心を動かされたのだ」というのが、自伝の中の彼女自身の言葉である。¹⁸ 彼女は、そのときとても奇妙な気持ちになったと語っているが、上演史を紐解いていてこのような舞台上のエピソードに出くわすと、偉大な俳優の人間性に触れたようで、アーヴィングがいきなり身近に感じられ、我々もやはり、奇妙な気分になるものである。ところが、アーヴィングはこのように瞬間にさえ、驚くべき機転を利かせるのである。「彼はわざとらしく指で涙を拭き、気持ちを込めてゆっくりと時間をかけて鼻をかんだ。舞台上で鼻をかむのにあまりにも気持ちを込めたものだから、観客はこれも、(デズデモーナの前で) 偽善を演じる彼の新しい演技だと思った。」¹⁹ 転んでもただでは起きないというか、舞台上で演じている最中にうっかり我を忘れて涙を流し、これほど感情的になっているときでさえも、このようなアドリブを見せるとは、やはりアーヴィングは並の役者ではない。それにしても、涙や鼻水まで偽善を演じる道具にしてしまうと、驚きである。

¹⁵ Terry, p.224.

¹⁶ Henry Irving, 'My Four Favorite Parts', *Forum* (September, 1893), p.36. Rosenberg, p.127.

¹⁷ *Athenaeum* (May 7, 1881). Hughes, p.146.

¹⁸ Terry, p.223.

¹⁹ *Ibid.* pp.223-24.

III

二日後の5月4日にふたりは役を交替した。どちらのイアーゴの方がよいのかで評価は分かれたが、舞台の人気にかげりはみられなかった。テリーは、アーヴィングの斬新な演技のあとでブースのイアーゴは月並みに思えたが、²⁰ 新聞、雑誌の劇評にはブースのイアーゴを賞賛する声も少なくなかった。タウズは「彼のイアーゴは常に、そして間違いなく、彼の最高傑作のひとつと考えられている」と述べている。²¹ あの印象的な葡萄を使ったアーヴィングの演技でさえ、マクミランズ誌の劇評家モリスには、「日時計に寄りかかり、目の前で起こっていることに無関心を装いながらも、ずる賢くしきりに獲物を見張っている、静かで恭しいブース氏の姿」の方がはるかに自然なものに思えた。²² ウィンターなどは、「アメリカ人俳優の方が優れていることに議論の余地はなかった。ブースのイアーゴがアーヴィングよりも勝っていると評価されているだけでなく、アーヴィングのオセローは、ブースと比べて印象も薄く、劣っていた」とまで言い切っているが、²³ 彼はブースのファンであり、親友でもある。どちらのイアーゴの方がよかったかは、好みの問題だろう。ただ、いえることは、ふたりは違う演技をし、アーヴィングはその斬新さを、ブースはその古風だが芸術的な演技を評価されたということである。

ブースのイアーゴはアーヴィングのように目新しい脇演技で注目されることはあまりなかったが、それとは全く別な意味で斬新であった。彼のイアーゴが以前のものとは異なり、アーヴィングのものとも対照的だった点は、彼が悪役らしからぬ演技を徹底したことである。彼のコンセプトは、「悪役を演じるな」である。

イアーゴを適切に演じるためには、観客が知っているようにはなく、ほかの人物たちが思い、話しているように見せるべきだ。その誠実さで観客の心さえとらえるべきだ。悪役を演じるな。(いやな顔をしたり怒鳴ったりして) 悪役に見えてもいけないし悪役らしく話してもいけない。常に頭の中でだけ悪役になれ。愛想よくして、時には陽気に、そしていつも紳士らしくしている。²⁴

もちろんイアーゴは、ほかの人物に見られているときには「正直なイアーゴ」になりきって

²⁰ *Ibid.* pp.224-25.

²¹ John Ranken Towse, *Sixty Years of the Theater* (Funk & Wagnalls Co., 1916), p.190.

²² Mowbray Morris, *Macmillan's Magazine*, XLIV (June, 1881), p.212. Rosenberg, p.128.

²³ William Winter, *Shakespeare on the Stage* (Moffat, Yard and Company, 1911), 1st series, p.275.

²⁴ Furness, p.214.

いるのだが、彼を演じる役者たちは時折、人物たちの背後に回ると、苦笑いをしたり眉をひそめたりして、観客にはその本性を垣間見せることがある。彼らはそうすることで、観客には常にイーゴーの二面性を印象づけるのだが、ブースはそのような演技を控え、常に徹底して相手に思われているような人物になりきった。彼は、よけいな仕草などしなくても、たとえばオセローには「信頼のおける味方で友人」になり、デズデモーナには「礼儀正しい召使い」、キャッシューには「率直で寛大な軍人仲間」、ロダリーゴーには「粋な伊達男」、だがエミーリアにだけは「信頼できない不可解で腹黒い策略家」になることで、その内面の悪辣さを強調したのである。²⁵

アーヴィングもまた、様々な仕草を交えながらではあったが、「ロダリーゴーは気まぐれにもてあそび、キャッシューには一番の親友になり、オセローには皮肉な考えを持ち、厳しい現実を知る複雑な人物に」と、それぞれに役柄を使い分けることで、その二面性をさらに強調した。²⁶ それぞれ、表現の仕方にもその目的にも微妙な違いがあるものの、この、相手によって姿を変える芝居の中でのイーゴーの演技は、彼を見る者にも演じる者にも面白みである。ふたりとも、イーゴーのこのような変わり身の速さは見事に演じている。

ブースは、ファーネスに送ったこの役の演じ方の中で、再三観客にもその誠実さを印象づけるべきだと言っている。副官としての職を解かれて名誉を失ったと嘆くキャッシューを励ますときも、ブースのアドバイスは、「意味ありげなまなざしで見つめるだけで、微笑んだり冷笑したりにらみつけたりもせずに、観客にさえも誠実さを印象づけるように心がける」ということである。

…あるいは、観客のことは気にしない方がいい。見られていることを忘れることができれば演技が自然なものになる。誠実に振る舞えば振る舞うほど、その企みが悪辣なものになる。…イーゴーは観客以外の者たちが考えているように見えるべきだ。ひとりになったときでさえ、仮面を完全に脱ぎ捨てる必要はあまりない。シェイクスピアは、役者にそのような苦勞をしなくてもいいようにしてくれている。²⁷

だから、第1幕の最後でキャッシューを罠にかける策略を考え込むとき、ブースは「前髪を額に垂らす」だけで、思いついたときの不気味な喜びの表情をアーヴィングのようには強調しなかったし、²⁸ キプロス島に着いたデズデモーナと親密に話すキャッシューを眺めるときも、彼を罠にか

²⁵ Lucia Calhoun, 'Edwin Booth', *The Galaxy*, VII (January, 1869), p.83. Sprague, *Shakespeare and Actors*, p.127.

²⁶ *The Theatre*, III, 3rd ser. (June, 1881), p.359. Hughes, p.145.

²⁷ Furness, p.146.

²⁸ Daniel J. Watermeier (ed.), *Edwin Booth's Performances: Mary Isabella Stone Commentaries*

けようという企みを観客には傍白しながらも、ブースは決して憎しみや軽蔑を態度に出さず、無関心を装って恭しく日時計に寄りかかっていたのである。

彼は、アーヴィングがしたような人目を引く仕草ではなく、目立たない演技でイアーゴーの気持ちを表現した。キプロス島に着いて間もなく、キャッシュオーが挨拶だと言って彼の目の前でエミーリアにキスするとき、ブースは「少しだけ嫌な顔」をした。そのあとの独白でイアーゴーが「キャッシュオーのやつも、おれのナイトキャップをかぶった疑いがある」——つまり、妻のエミーリアと寝た疑いがある——と言っているからである。²⁹ また、その独白も、その直前には、調子よくロダリーゴーにデズデモーナがもうすでにキャッシュオーを好きになっている理屈を並べ立てていたのだが、ブースはゆっくりと、考えながら話し始める。「キャッシュオーはあの女に惚れている、これは確かだと思う。彼女もあいつに惚れている……」と言ったあと、「その可能性を問うかのよように間を開けて」から、「…これもあり得る、まず間違いない」と台詞を続けたのである。³⁰ そして、次の第2場、夜警に就く前にキャッシュオーに酒を飲ませるための雑談の中でわざわざデズデモーナを賛美して、「なんという目をしているんだろう。男心を挑発しているようだ」と言うときも、ブースは自分の考えを確かめるために「キャッシュオーをつぶさに観察」した。³¹ イアーゴーはロダリーゴーに話しているほど自分の考えに自信を持っているわけではないのだろう。アーヴィングはイアーゴーの不安を絶えずそわそわしている仕草で表したが、ブースは、それでも策略を実行に移していかなければならないイアーゴーの不安と抜け目のなさを、このように、自分の考えを慎重に確認する演技で表現したのである。これらブースがファーネスに送った注釈には、「作者が書いたト書きと同じくらいの価値がある」とスプレイグは評価している。³²

第3幕第3場、イアーゴーがオセローを唆して嫉妬させる場面でも、ブースは極力、いかにも意味ありげな表情や仕草を抑えた。キャッシュオーがデズデモーナから去っていくのを見て「あっ、これはまずい」と言うときも、ブースはオセローにも観客にもはっきり聞こえるようにはなく、「独白のように、それでもオセローには聞こえるように注意しながら」、³³ 「ほとんど観客には聞こえないくらいの声で」言った。そして、彼女がキャッシュオーの復職を懇願しにオセローに近づくと、ブースはその場で彼らの会話を聞いていないで、エミーリアと共に舞台奥の扉から退場し

(UMI., 1990), pp.160-61.

²⁹ Furness, p.105. ブースはここで、キャッシュオーにエミーリアの手ではなく顔にキスさせている。

³⁰ *Ibid.* p.120.

³¹ *Ibid.* p.127.

³² Sprague, *Shakespearian Players and Performances*, p.131.

³³ Watermeier, p.179.

た。「自分たちがいては邪魔になるだろうし、上官の会話の間はその場にいない方が適切」だと考えたからである。³⁴

オセローとデズデモーナが話している間にブースは再び奥の扉から現れ、ふたりの様子を「冷たい笑みを浮かべながら眺め」、彼女が退場するとオセローに近づいて、キャシオーがオセローの求愛を知っていたかと尋ねた。オセローの返答で彼は「眉間にしわを寄せるが、顔をしかめたりはせず、少しがっかりした様子で」、驚いて「本当に」とつぶやいた。³⁵ キャシオーの誠実さを話題にしても、「極力意味ありげな様子を見せず」、「あたかも不愉快な話題を早く終えてしまいたいかのように」、「それなら、キャシオーは正直な男だと思います」と言った。³⁶ オセローと話するとき、ブースは常に「ゆっくりと、穏やかに、ほのめかしながらも誠実に」話した。だから、「結果的にオセローが疑惑に確信を持つようになるのも、イアーゴ어의様子と言葉のため、自然でやむを得ないことのように思われる」と言って、ストーンはブースのこの場面での演技を絶賛している。³⁷ カルホーンも、ブースの誠実を装う演技の徹底ぶりを次のように語っている。

…意味ありげにウィンクしたり顔をしかめたりもしない。独白するとき以外には胸の内を明かすようなこともしない。…いつ会話の途中でオセローがいきなり振り向いても、彼に見られることを意識してつくった、真剣で思いやりに満ちた、丁寧で困惑した顔しか見ることはないだろう。³⁸

ただ一度だけ、彼の話で自分たちの結婚に自信を失いかけて「両手に顔を埋めている」オセローを残して退場しようとするとき、ブースは「素早く勝利の恐ろしい笑みを浮かべ、オセローの心臓から血を絞り出すように拳を握」った。ほんの一瞬のことである。しかもブースは、これくらいの仕草でさえも「控えめに」すべきだと言っている。³⁹ 次から次へと人目を引く目新しい演技で観客を驚かせ続けるアーヴィングのイアーゴ어의あとで、ブースのイアーゴ어にテリーが物足りなさを感じてしまったのも、無理もないかもしれない。観客にまで本当に誠実だと思われるほどのブースの演技は高い評価を得ているものではあるが、当時アーヴィングの斬新な演技を期待してライシームに詰めかけた観客の多くも、おそらく彼女と同じように感じたこと

³⁴ Furness, pp.161-62.

³⁵ *Ibid.* pp.166, 167.

³⁶ *Ibid.* p.171.

³⁷ Watermeier, p.180.

³⁸ Calhoun, p.83. Rosenberg, p.129.

³⁹ Furness, p.188.

だろう。

ブースはイアーゴを演じるときは、常に素早く動くよう心がけたが、このとき、いったん立ち去ろうとするが、両手に顔を埋めて結婚を後悔し始めているオセローを振り返り、これ以上詮索しないように声をかけてから退場するときだけは、「いたわるように敬意を示しながら、ゆっくり立ち去」った。⁴⁰

ブースはイアーゴを演じるときもデズデモーナには優しく接したが、エミーリアには優しくしなかった。オセローがデズデモーナと共に退場したあと戻ってきて彼女を見たときも、「オセローの胸に突き刺したナイフをさらに深く刺そうと思って戻ってきたので、オセローがいないことにながっかりし」、無愛想な態度をとる。ハンカチの話がされても、はじめは無関心だった。ところが、それが盗むように頼んでいたハンカチだと聞くと、「期待に胸ふくらませて素早く振り返り」、「盗んだのか」と聞いた。ハンカチの使い道を聞かれると、ブースは「なぜって……」と言って「いい言い訳を考えているかのような、何かわけのありそうな間をとってから」、「どうでもいいだろ」と言いながら、彼女からハンカチを奪い取った。そして、多くの俳優たちのように彼女を抱きしめたりキスしたりするようなことはしないで、彼女を追い払った。⁴¹ この場面のイアーゴはオセローを唆すことで頭がいっぱいのはずだからだろう。

オセローに証拠を見せると迫られてやむなくキャシオーが寝ぼけたときの話をするときも、ブースは「ためらいがちに、そして、決して彼女が嫌いだからではなく、オセローを思うあまり、彼がひどい目に遭うのが耐えられないから話しているよう」に話した。⁴² 夢の話が聞かされ、激情に駆られてオセローが思わず、「あの女、八つ裂きにしてやる」と言って飛び出していこうとするときも、ブースは「いいえ、落ち着いて」と言いながら、つかんでいた手で引き戻した。⁴³ 跪いて復讐を誓うオセローの横で彼への忠誠を誓ったあと、キャシオーの殺害を命じられたとき、彼は「ショックを受けて、少しふるえながら立ち上が」った。「でも、あの方は殺さないでください」という次の台詞も、ブースは「懇願するように」言った。彼の企みを知らされている観客でさえ、しばしその悪巧みを忘れて彼の誠実さを信じ込んでしまいそうな演技である。そして、ブースはここまで終始深い悲しみの表情をしていたのだが、「これからはおまえが副官だ」というオセローの言葉を聞くと、素早く膝をついて彼の手にはキスし、その顔には勝利の色を浮かべた。⁴⁴

⁴⁰ *Ibid.* p.189.

⁴¹ *Ibid.* p.196.

⁴² Watermeier, p.188.

⁴³ Furness, p.208.

⁴⁴ *Ibid.* p.214.

第 4 幕第 2 場は場所の特定が困難な場面である。前半でオセロー、デズデモーナ、エミーリア、イアーゴーが話しているのは、オセローとデズデモーナが滞在している城の中の一室と思われるが、後半、他の人物たちが退場したあとイアーゴーがロダリーゴーと話すのが同じ部屋の中とは考えにくい。おそらく、背景がなく、場面の転換に手間暇をかけなかったシェイクスピアの時代の舞台では、観客が人物たちの話す内容から場所を想像していたから問題はなかっただろうが、舞台の作りに凝った 19 世紀の劇場では何らかの工夫が必要になる。ブースはここをふたつの場面に分け、前半は舞台奥中央に人物たちのシルエットをくっきり浮かび上がらせる紅いカーテンの掛かった城の一室にし、後半はイアーゴーが滞在している家の前の通りに設定した。

エミーリアに呼ばれて駆けつけたのだが、ブースは片手に帽子を持ち、彼女よりも先に急いで登場した。彼の態度は「同情、親しみ、敬意、優しさと哀れみにあふれて」いた。デズデモーナがオセローに淫売呼ばわりされたことをふたりから聞くと、彼はエミーリアに支えられて立っていたデズデモーナを支えながらカーテンの前の椅子にかけさせた。エミーリアがいきなり「どこかのとんでもない悪党が、何かの職にありつこうと思ってこんな中傷をでっち上げた」からだと言い始めると、彼は憎しみと怒りで彼女をにらみつけるのだが、その間にデズデモーナの椅子の後ろを回って彼女のすぐ横に立ち、エミーリアの話に無関心を装いながらも、デズデモーナには同情を寄せ、関心を持ち、丁寧に接した。⁴⁵ 彼女に付き添おうと近づいてきても黙らないエミーリアを「わめくんじゃない」、「馬鹿なことを言うな」と叱りつけるとき、ブースは彼女に近づいて小声で言い、⁴⁶ また、椅子から立ち上がり、跪いて神に誓うデズデモーナが途中で倒れそうになったときには、彼女を支えるように、彼は思わず両手をさしのべた。⁴⁷ エミーリアに対する態度とのコントラストが、彼のデズデモーナへの思いやりを、さらに強く観客に印象づけたことだろう。

この場面の後半は場所が変わってイアーゴーの家の前である。上手奥の家から出てきたブースが下手から登場したロダリーゴーと家の前の通りで出くわす。ロダリーゴーはこれまでにない勇ましさと決心をみなぎらせて彼に詰め寄るが、ブースが厳しい表情で彼の目を見つめながら聞いていると、彼はひるみ、その語気も次第に弱まって、最後にはいかにも自信のなさそうなクレームになってしまった。彼が話し始めたときの勇ましさとほとんど聞き取れないくらいになってしまった話の終え方とのコントラストが、観客の笑いを誘った。そして、はじめは手を差し出され

⁴⁵ Watermeier, pp.193-94.

⁴⁶ Furness, pp.267-68.

⁴⁷ Watermeier, p.195.

でも握手を拒んでいたのだが、いつものように親しげに説明されると、おとなしく言いくるめられてしまうのだった。オセローに命じられたときにはショックを受けたキャッシュオーの暗殺を、ここでロダリーゴーに委ねるとき、ブースは「キャッシュオーにいなくなってもらおう」という曖昧な言葉、ゆっくりと謎めいた言い方で話した。⁴⁸

第5幕第1場もイアーゴーの家の前の通りである。舞台奥、イアーゴーの向かいの家のところでロダリーゴーに待ち伏せを指示すると、ブースはいったん自分の家の中に隠れるのだが、次のロダリーゴーの短い独白の間に玄関に現れ、彼に聞こえないくらいの声で企みを独白した。キャッシュオーが現れるとロダリーゴーが襲いかかるが、逆に刺されてしまう。そこへブースが来て、まずロダリーゴーの剣をたたき落としてから、キャッシュオーの足を後ろから切りつけて走り去った。ブースはここでオセローの登場は削除し、ロドヴィーコーとグラシアーノーがおずおずと登場してくるのを遅らせ、キャッシュオーにとどめを刺そうとする演技を見せた。ブースは左肩から白と黒のストライプのマントを掛けたシャツ姿で、左手にろうそく、右手には剣を持って現れた。彼はロダリーゴーを刺し、その間にキャッシュオーはデズデモーナのハンカチをポケットから取り出して傷ついた足を縛った。闇討ちだというのに「この町はなんて静まりかえっているんだ」と言いながら、ブースはキャッシュオーを殺そうと剣を振り上げるのだが、ここで明かりを持った者たちを近づいてくるロドヴィーコーとグラシアーノーの姿が目に入り、暗殺を断念して「人殺しだ」と叫んだのである。⁴⁹

ブースとアーヴィングは違う演じ方をしたのだが、アーヴィングも、ここでのキャッシュオーにとどめを刺そうとする演技は取り入れた。演出は異なっていたことは言うまでもない。場所は、同じようにイアーゴーの家の前、建物に挟まれた舞台奥へと続く暗い通りである。アーヴィングもロダリーゴーに待ち伏せさせておいて、彼がキャッシュオーに傷つけられると出てきてキャッシュオーを襲って姿を消す。再び出てくると、今度はロダリーゴーを殺して、キャッシュオーにもとどめを刺そうとするが、そのとき舞台奥のアーチから警備が現れて、彼は思いとどまる。すると、彼はあわてて家の中へ逃げ込み、自分が関わったことを隠すために何食わぬ顔で窓から顔を見せたのである。⁵⁰ ブースはロドヴィーコーとグラシアーノーの登場を遅らせて、キャッシュオー暗殺の緊迫感をぎりぎりまで高めたが、アーヴィングはそのあと、このようなコミカルな演出を試みてその緊迫感を緩和したのだった。

⁴⁸ Furness, P.273.

⁴⁹ Watermeier, p.199.

⁵⁰ Hughes, pp.145-46.

最後の場面で悪事が露見して引き立てられていこうとするとき、ブースは勝ち誇るイアーゴーを演じて、その悪役ぶりを強調した。彼はエミーリアを殺して逃げ去ったあと縛られて連れてこられるのだが、右腕だけはなんとか振りほどいた。⁵¹ それまでは完璧に誠実な人物になりきっていたのだが、彼はここで初めて、縛られ、血を流しながらも、「聞いても無駄だ。知っていることは分かっているんだろう。おれはもう一言も話さない」と言って口を閉じ、「恐ろしい顔で歯ぎしりし、親しい者たちにもその冷淡で悪辣な正体を見せた」のである。⁵² そして、オセローがデズデモーナに最後のキスをして、グラシアーノの足下に倒れて幕が下りるとき、ブースは引き立てられていく途中、オセローが倒れているところで立ち止まり、「オセローを見下ろすように立ち、勝ち誇ってその屍を指さし、満足げな憎しみの笑みを浮かべながら栈敷席を見上げた」のである。⁵³ イアーゴーはロダリーゴーには、しきりにオセローを憎んでいると話している。キャッシュオーとロダリーゴーを殺して、地位と金を手に入れる企みはすべて挫折したのだが、あるいは彼の究極の目的は、自分をおいてキャッシュオーを副官に選んだオセローに復讐することだったのかもしれない。それまで誠実を装ってきただけに、捕らえられてもなお浮かべる不敵な笑みは、その悪辣さをよけいに際だたせるものとなったのである。しかし、最後に勝ち誇るイアーゴーは、元々キーンが考案し、ブースはそれを父親経由で引き継ぎ、改良したものである。これは、ディキンズが最もライシームの雰囲気にとぐわぬ演技の一例に挙げているように、アーヴィングの人目を引く目新しい演技に喝采を送っていたこの劇場の観客には、少し奇異な印象を与えたことだろう。アーヴィングも最後にオセローに対するイアーゴーの勝利を表現したが、彼は引き立てられていく際に辺りを見回し、オセローに目をやると肩をすくめただけであった。⁵⁴

この共演は週に3回ずつ、6週間続けられた。結局、ブースとアーヴィングの競演は、アーヴィングがオセローをうまく演じられなかったため、イアーゴーでのものとなってしまった。この共演が終わった夜、アーヴィングがオセローの衣装を一枚ずつたたんで、「もう二度とやらない」と言って両手をあげ、大きな安堵のため息をついたという話は有名である。⁵⁵ 彼はその後もイアーゴーは演じているが、その言葉の通り、オセローを演じることは二度となかった。一方のブースは、その後も両方の役を演じ続けた。1886年には、イアーゴー役でサルヴィーニのオセローとも共演している。19世紀最大のオセローとイアーゴーである。しかし、このときすでにふたり

⁵¹ Watermeier, p.207.

⁵² Towse, p.191.

⁵³ Dickins, p.98.

⁵⁴ *Saturday Review* (May 14, 1881). Hughes, p.150.

⁵⁵ Terry, p.225.

とも 50 代、全盛期の活力は衰えていた。特にブースの方は、前述のように数々の試練を果敢に乗り越え、栄光を手にしたあとの失望と不幸を経て、彼の俳優人生の中ではもう晩年にさしかかっていた。酒のせいで健康も害していた。本来なら、アーヴィングとの競演よりも歴史に残る舞台になっていたはずであるが、その力を出し切れなくなっていたのが非常に残念である。

しかし、ブースもアーヴィングも見事にイアーゴを演じた。ふたりの演じたイアーゴは、間違いなく、どちらも時代を代表する役柄のひとつである。ふたりはそれぞれ違う演技方でその演技を競ったが、内面の悪を極力表に出さずに誠実な人物になりきるブースのイアーゴも、斬新な工夫の数々で観客の目を釘付けにしたアーヴィングのイアーゴも、史上最もすばらしいイアーゴのひとつに数えられるものである。1881 年初夏、ひと月半にわたってライシヤムムの舞台に交互に登場したふたりのイアーゴは、それぞれ評価は異なるが、どちらもすばらしい演技でこの劇場に詰めかけた観客を魅了したのである。

